

船舶無線通信士となり、国際航路に就航して三十年間、八十カ国に寄港して国際的視野を大きく開眼させられた。

定年退職し、平成三年に兵庫県福祉センター内にある、中国帰国者自立研修センターの藤岡重司所長から招かれて、残留婦人や孤児とその家族と毎日を過ごしている。誠実一路の阿部次郎氏である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

新京・終戦前後の私の思い出

沖繩県 池宮城 澄 子

私は大正十三年一月十三日に福島県二本松で生まれました。父は当時、税務署に勤務していましたので、五所川原その他を二、三年ごとに転勤をしており、青森県野辺地で小学校にありました。二年生のとき、山形県米沢市に転校。四年生のときは山形市第五小学

校に転校。この学校の高等科二年のときに、父の満州国への転職を知らされました。

当時の満州国は建国後間もなく、治安もまだ不安であつたらしく、親戚はみんな父の翻意を促したとのことでありますが、父の決意は変わらなかつたようです。今から考えますと、父には子供七人の人世帯の日本国内での生活の維持に、強い不安感があつて、父母は相談し合つての決意であつたように思われます。

父は昭和十二年、まず単身で当時の満州国の首都新京特別市の満州拓殖公社に赴任しました。任地の様子の下見と住宅の確保が目的だったのでしよう。

翌十三年三月、満州の厳寒も過ぎましたので、父は家族を迎えに下関まで出向き、母は七人の子供を引率しての渡満で、下関で落ち合つて関釜連絡船で釜山に上陸。朝鮮半島を一路縦断して鴨綠江の鉄橋を渡ると、そこはもう大陸の入口で、汽車が新京駅に着いたのは、昭和十三年三月十五日の深夜でありました。

前夜からの雨で新京駅前の広場の水たまりには氷が張っていて、寒さにふるえたことを今でも覚えており

ます。生まれて初めて馬車に乗って大同大街を一直線に南にひた走り、父の準備した永昌路の住宅にたどり着くことができました。永昌路の住宅は二階建て、四大家族が住み、それぞれ勤務先が異なる方たちでした。

順天警察や満州炭硯公社（現吉林大学）学生会、興農合作社中央会などの会社の近くに住宅がありました。その後の新京の街は、満州建国の真っ只中であって、新しい大きな建造物が次々に立ち並び、昼夜を問わず、連日、早朝から数知れぬ大車の列が引きもきらず、砂ぼこりをあげながら往来する様子は、活気に満ち満ちていました。

間もなくして、姉は会社勤務、私は中央通り満州日報裏隣の新京実践女学校（後の弥生高等女学校）に入学し、楽しい学校生活を送ることができました。卒業と同時に、住宅から近い所にあつた興農合作社中央会に入社いたしました。

日本本土は戦局もだんだんと進んでおり、新京の各特殊会社や官庁辺りでも、軍事教練が頻繁に行われるのが目立ってきて、何かしら戦争が身近に迫りつつあ

る予感がいたしました。それでも社会人となつて、二年間ほどのつかの間ではありましたが、楽しい青春の日々を過ごしました。

昭和十五年八月関特演（関東軍特別演習）の臨時召集があつて、中央会からも三人応召がありました。この臨時召集は一カ月の教育を終えて解除になり、職場にまた復帰いたしました。三人のうち、二人の方はその後、病気で故人になりましたが残りの一人が奇しくも縁があつて、私の主人になりました。興農合作社中央会は、全満の各県旗に単位合作社を持つ全満組織の農村金融機関で、興農部の指導下にありました。

主人は職場にありながら、昭和十六年四月から新京法政大学（初期は城内五馬路、後に南嶺新校舎に移転）夜間の法学部に入学して、勉強を始めておりました。

昭和十八年三月二十八日に、私どもは中央会初の職場結婚で結ばれました。新京神社で挙式、花嫁衣装で中央通りを横切り、吉野町入口付近の写真屋に入つて

記念撮影を終え、再び徒歩で吉野町を通り抜け、第一ホテルでささやかな披露宴を挙げました。今はそのとき、お世話になった中央会や身内親戚の皆さんもほとんど故人となられました。時局切迫のせいもあってか、あるいは私たちの結婚に触発されたかのように、中央会はひとしきり結婚ブームでにぎやかでありました。

主人は昭和十八年十一月繰り上げ卒業。また、職場も中央銀行と興農合作社の双方で新設した興農金庫本店（豊楽路・元國都飯店・豊楽劇場となり）に、勤務することになりました。

主人の話によると、沖繩での商業学校の同級生の永山盛光さんという方と同じ課で、席を並べることになったと、余りの奇遇に驚きよろこんでおりました。その永山さんは五十年後の今も郷里沖繩でご健在で、時折、ごあいさつの機会があります。

結婚の翌昭和十九年一月、満州電々病院で長女幸枝を出産いたしました。産後が余りよくなく、乳腺炎で五十日の入院を余儀なくされました。そのときお世話になった病院の内科部長が沖繩の方で、與世里先生

でありましたが、戦後関西に引き揚げられ、間もなく急逝されたとお聞きしました。先生の奥様は新島正子様で、現在郷里沖繩の諸方面でご活躍をなされておられます。退院して間もなく、今度は肋膜炎を患い、グイヤ街の西村病院に四十日の入院生活を送ることになりました。幸い、幸枝の面倒は実家の母や姉妹が見てくれましたので、助かりました。

昭和十九年は、実家の花井、婚家の池宮城両家にとり大変な年になりました。花井では六人姉妹弟のただ一人の男子（弟）が予科練に入隊、天理市に出発。秋には一番仲のよかつたすぐ下の十八歳になる妹亮子を結核で失い、実家は急に寂しい日々が続きました。

また一月に、沖繩から主人を頼って新京に来ていたすぐ下の弟で正栄さんが、二十年五月、密山方面に繰り上げ入営をしましたが、十一月十五日、牡丹江第八陸軍病院で戦病死を遂げたことが、引揚げ後届いた公報で知り得ました。正栄さんの場合は、入営通知と山口県の陸軍通信学校合格通知の両方が同時に届き、その選択に悩んでいたのを、主人が入営を勧めたことも

あり、強く責任を感じている様子で、判断の誤りを今でも悔やんでいます。これも、戦後引き揚げて後に知ったことですが、敗戦前年の昭和十九年八月二十二日には、せめて末娘の菊子さん（主人の末妹・小学校六年生）だけでもと戦場になることが分かりきっている沖繩から、疎開させようとの沖繩の両親の配慮があらくなって、学童疎開船対馬丸は鹿児島石島沖で、米潜水艦の魚雷で撃沈され、引き揚げられないまま、千数百の遺骨は船と共に海底に眠っています。菊子さんは那覇市の波の上にある小桜の塔に祭られておりませんが、平成七年は、戦後五十年の大きな節目の年ということで、激戦地であった沖繩本島南部の摩文仁に、沖繩戦で戦死した内外二十万人を超す人々と一緒に、「平和の礎」に弟妹二人も名前が銘記されました。

昭和二十年六月、沖繩戦は破れ、両親弟妹の安否も不明のまま、主人は不安な気持ちをしばらくは酒でまぎらわせておりました。

昭和二十年七月主人にも召集令状がきました。

満州国内のすべての官庁や特殊会社などに勤める日

本人は老若を問わず召集の対象になりました。機能はすべて停止し、当時根こそぎ動員と言っておりました。主人は丸坊主頭になり、満一歳になった娘幸枝の写真一枚をポケットに入れ、集合地の新京神社北側の新京商業学校庭に集合するために、家を出発しましたので、私は、実家の父と共に娘を連れて、主人と四人で馬車に乗って集合地の近くまでまいりました。

主人は馬車から下りてしばらく歩いてから、一度は私の方に振り返って合図をしましたが、その後は真つ直ぐ向いて校庭の中に入ってしまいました。当然のことではありますが、主人たちはこれからどこに行くのだろうか、また、そこでは何が起こるのだろうか、ただ心配と心細さで胸がいっぱいになり、もう二度と会えないのではないかと、娘をだきしめて馬車に乗り、ただ涙にくれたことでした。

それからは主人のいない日が明け暮れて、八月八日を迎えました。この日、私は娘を背負い高粱一斤分を持って、慈光路の森の市場の脇から鉄道線路を越えて、中国人のテント小屋でやっている爆弾（当時は今のポ

ツブコーンをこう呼んでいました)を頼んでいるところでした(当時、おやつとしてはそれくらいしかありませんでした)。出来上がりを持っていったところ、突然空襲警報が鳴り響きましたので、高梁を引き取り、一目散に家に帰りました。近所の方々の話ではB29爆撃機の空襲らしいと言われて、アメリカから遠い新京まで飛んでくるとは、もうここも駄目だと思い覚悟をしましたが、後で分かったことは、ソ連の参戦とのことで、余計悪い状況になると思いました。その晩から空襲がありました。

私の社宅は、南新京に近い慈光路の豊寿ビル二階にあり、近くには、桜木小学校や森の市場と言われている青空市場がありました。ビルの一階は、齒科医院や漬物屋さんがありました。空襲が始まると夜中に漬物屋の御主人に地下室に避難させてもらい、その御家族と一緒に難をさけました。時々御主人は、火の手がどの辺りにあがっているとの情報を持ってきたり、共同で炊き出しをして、不時の空襲に備えて準備をしました。市立病院の近くが爆撃されて大きな穴が空いて

いるとの噂話も飛びました。

そのころ、近くの緑園住宅の関東軍宿舎から毎日のようにトラックが新京駅に向かっていての話で持ち切りになっていました。

八月十二日、姉の泰子が突然一人で訪ねてきました。「今から永昌路の花井の実家に家族集合して、姉の主人の計らいで、首都警察の最後に残った消防車を改造した自動車が出るから」とのことで、皆揃ってこれから郊外に疎開することでした。皆、家族手分けをして、おにぎりやドーナツを作り、持てるだけの荷物をまとめて出発することになりました。満拓に勤める父(花井弘)は、会社の用務で興安北省三河地方(當時)の国境地帯に出張に出たままで、音信不通でありました。わかるように父にはそこで、疎開する旨の言葉を妹が紙に書いて玄関のドアに貼りつけました。出発までの寸暇を利用して、翌朝豊寿ビルの社宅に残りの品物を取りに帰って見ましたところ、銀行関係の方の社宅は、すべて玄関は開けっ放しになり、靴は散乱し、押し入れからは綿入れのネンネコなどが転が

り出ていました。どの家に声を掛けても返事はありません。杉村歯科医さんの妹さんに事情をお訪ねしたところ、昨夜のうちに銀行（主人の勤務先興農金庫）から人が見えて、全員を引き連れて、朝鮮經由で日本に帰ったとお話でありました。

私は取り残されたわけでありませぬ。私は立ちつくしたままだれもいなくなった社宅の廊下に一人泣きくずれてしまいました。

その日の夕方、いよいよ花井一家の疎開への出発です。取りあえずの行き先は、新京郊外にある農事訓練所とのことでありましたが、夕闇迫るころ、田舎の道は、リヤカー、荷車などリュックサックを背負った人たちの行列が続いていました。どこまで疎開できるのか、だれ一人その後のことを知らない日本人の群集です。軍から見放された在満邦人であります。

屋根のない自動車に十五、六人と共に乗車の私たちは一時間も走ったところで、突然下車させられて、車の下にかくれるように言われました。暴民が襲ってくるらしいとのことでありました。流言であつたらしく、

三十分ほどで再び出発できましたが、しばらく走つて車はまた止まり、暗闇の中を豆電球で足元だけを照らしながら、やっと目的地らしいところに着きました。

目をこらすと、大きな学校のような建物でした。オンドルが部屋いっぱいであり、上にゴザを敷いて、ようやく第一日目の夜を過ごすことができました。翌日から、通化、安東へ向けての疎開に出発することを正面に考えての行動でありました。今考えたら、全く恐ろしい無謀極まる行動であつたと思います。そこまで追い詰められた立場に、一般邦人は置かれていたのです。

私たちより二、三日前に出発した方たちが、暴民に襲われて頭を割られたり、殺されたりしたとの情報があつて一同不安にかられ、足がすくむ思いでありました。とにかく、今の場所から前進しなければならぬが、自動車が一台もないとのこと、荷物はごく少量に限り持つこと。これから歩いて山を七つ越えなければならぬので、持てない荷物は大風呂敷に包み、この建物の部屋の隅に置くことにしました。いよいよ明

日は、この計画で出発しようとの覚悟をきめて眠れぬ夜を送りました。当夜は、夜半から物すごい大雨と雷が鳴り響きましたので、何とか明日の出発は中止になればと、そのことばかり考えておりました。

ところが、翌朝は晴天、昨夜の雨は嘘のごとく晴れてホッとしましたが、出発が気がかりでした。そこに引率者の方から伝達があり、突然状況が急変して、これから新京にいったん戻るとのことです。しかし、依然気持ちは引き締めていて欲しいとのことでありました。昨夜の雨で生気を取り戻した青々と続く麦畑の道を、新京へと向かい、ひたすら歩き続けました。途中思い出したように時折、大砲の音が響き渡っておりまして、これから先どんな運命が私たちを待っているのか、不安にかられながら、いつの間にか新京駅に着いていました。大きな荷物は、その場で駅に預かってもらい、大同大街を一直線に南下して永昌路の実家にたどり着き、三日ぶりに我が家での食事をとることができ、また風呂にも入れて、ホッとした

一夜でありました。

翌八月十五日は、正午に重大放送があるとのことでしたが、母は隣家に出掛けて不在、昼食の用意をしていた私の耳にラジオから聞き慣れない声が聞こえてきました。勅語のように思われましたが、それが天皇の終戦のお言葉だったのです。

これは後で知ったことではありますが、前日の十四日に、私たちが疎開に失敗して新京駅にたどり着いたとき、実は駅には七月に応召した主人が、引率の准尉さんを含めて一行九人と共に、新京六百部隊に新設師団の衛生材料を受け取るため出張してきていて、私どもがいた同時刻ごろ、現場にいたとのことでありました。

主人の話によると、七月に応召後、吉林省磐石^{ばんせき}に部隊が設営されたが雨の毎日で、軍服の支給があつてから間もなく、師団から衛生兵数人が新京への衛生材料受領出張を命ぜられ、吉林まで行くことができたものの吉林、新京間の鉄道が止まっていたため、興農金庫吉林支店長井原さんが元上司であつた縁から、トラックをお借りすることができ、敗戦の八月十五日の一

週間ほど前に、新京に着いていたとのことであります。

衛生材料受領も終わった十四日午後准尉さんから半日の特別許可をもらって豊寿ビルの我が家と永昌路の妻家を義兄小南寿（当時首都警察勤務）さんを誘って訪ねてみると、全員がどこへ疎開したかもわからず、両家共に無人の空き家であることを確認した上で、新京発最後の汽車に衛生材料を乗せた貨物車二両を連絡して出発したが、翌十五日車中で終戦を知り、梅河口で一時下車して東方遙拝、磐石で原隊が既に撫順中学に移動しているのを知って、やっとさがして原隊に帰れたとのことでした。

主人は主人なりに新京の無人の両家を見て、満州での家族の生き別れが紛れもない現実になっているのを感じたと言っておりました。

私はまた私で、玄関の父へ残した張り紙に「日本向け出発する旨」書いておいたので主人と義兄は、がっかりとホッとされたのが入り交ざった気持ちで建物に入ったことだろうと思ひ、半日の擦れ違いはもはや今生では二度と会えない運命だと思っていました。

八月十五日の夕方に隣組長さんから、荷物をまとめて中央会斜め向かいの満炭の建物に集合するように、との連絡があり、リュックサックを背負い娘を抱いて出掛けました。建物の中にはあちらこちらから大勢の人が集まっており、その中には、目を血ばしらせた兵隊があつちこつちで銃を構えていたり、がっくりと座り込んでいる者など異様な風景でありました。

南嶺方面で満軍の反乱が起き、日本人将校が何人か殺害され、市内に進撃してゐるらしく、銃声が迫っていました。しかしながら、どのくらいの時間が過ぎたかわかりませんが、いつの間にか周囲はすべて静かになりホッとしました。主人のいない、隣人もいなくなつた豊寿ビルの我が家に帰る気にもなれず、そのまま実家に世話になっておりました。

敗戦後の八月下旬ごろから、ぼつぼつ除隊兵らしい人たちが町中に目立つようになりました。あるいは、除隊兵らしいりっぱな将校が通りかかったので、情勢を尋ねたところ、南の方は場所によっては部隊解散となり、自分なりの行動がとれた、とのことでありまし

た。これを聞き、主人も元気であればきつと帰つてくると、希望をもって待ちました。

涼しくなりかけた九月中旬、外で遊んでいた末の妹和子が、「池さんが帰ってきた」と大声で駆け込んできました。二階の窓から目に入ったのは、紛れもなく主人の姿でした。リュックサックを背負い、やつれた主人の顔が笑っていました。主人は、新京にはもはや疎開してはいないはずの私たちが実家にいたので、驚くとともに安心したとのことでありました。

磐石から移動した原隊は撫順中学で、別段することもなく日を過ごした。時には付近の山に重機関銃を埋める作業に従事した。しばらくして満州国内からの召集兵については、部隊長裁量で部隊解散を行って現役兵と区分した。この部隊長の配慮で、主人の部隊の応召兵の多数は、部隊丸ごとのソ連のシベリア連行から免れることになったそうです。

ソ連兵が撫順に進駐するとのことで、解散兵は撫順を立ち退く必要に迫られたが、主人は疎開で無人になっっている自分の家と、私の実家を目で見ているだけに、

撫順を脱出するに際し、奉天に出るか、馬車で安東に出ようか随分迷ったとのことですが、不思議にも家族と再会の可能性の低い撫順城を経て、北行きの新京に行く徒歩のコースを自然に選んでいたとのことであります。着ている服は召集を受けたときの協和服ですが、ほかには軍服のままや、ゴボー剣を持っている人もおり、昼は山に寝て、夜、犬に追われながらの逃避行を四、五日も続けて鉄嶺に着き、興農金庫鉄嶺支店の高松康夫支店長の御好意で、全員が一夜の宿とお風呂のお世話をいただいたそうです。

その後は各自ばらばらの自由行動をとったが、主人はソ連軍のガソリン運搬車に中国人に紛れて乗ったりしながら、南新京駅通過の際の汽車の徐行時を利用して飛び下り、果たしてまだ、だれか家に人がいるだろうか、もういないのではないかと考えながら永昌路の私の実家を目指して帰ってきたら、和子が見つけてくれて本当に嬉しかった、とのことであります。

ソ連軍の進駐後はソ連兵をあちこちで見かけるようになり、不安な日々が続きました。ソ連兵の大部分は、

シペリヤ死刑囚との噂もあつて、戸締まりを嚴重にし、女性や子供の外出は努めてさげました。

豊寿ビルの我が家に帰り、玄関のガラス戸を板張りの頑丈な扉に作り変え、ソ連兵の不時の侵入に備えました。

日本兵の引揚げがはつきりしないところから、主人は最悪の場合は、長期滞在を余儀なくされることもあり得ると考え、長期戦に備えて食糧の確保の一策として、碎米六十キロ入り二袋を安く買い入れました。砂や小石がまじつていて、毎日これを取り除くのが一仕事でした。そのころの主人の日常の仕事は、南瓜や葱の販売、砂糖、サツカリンなどのブローカー的商売で、わずかな稼ぎを得て生活を維持することに努めていました。

そのころ、国境付近の奥地の開拓団から避難してきた方たちが毎日のように町にやってきました。衣類は身ぐるみはがされ、代わりに麻袋に首と手の部分に穴を開けて、縄で胴をしぼつての姿を見たときは、これが敗戦国の日本人のだと、悲しい思いに涙いたしま

した。

しばらくして国境付近に出張して音信不通となつた実家の父、花井弘も帰ってきましたので、母もホツとしたようでした。

主人は両隣の馬渡さん、伊藤さんとお金を出し合つて葱と木炭の商売を始めました。ガスも水道も止まり、電気だけが辛うじて部屋をぼんやり照らしておりました。

ソ連兵は、マンドリン銃をかざして民家に押し入り乱暴、略奪を重ねており、日本人を恐怖に陥れていました。

そんなある日、滝沢と言う世話役のような人が見えて、「ご主人は明日は南嶺に行くので厚着をさせてください」と言われ、意味がよく分かりませんでした。

次の日、長春駐屯司令官ペトロフ中佐の名前で、隣組長を通じ召集令状が主人や、隣の馬渡さんに届けられました。「ソ連から召集令状がくるなんて、馬鹿な！」と主人は怒っていましたが、行かない場合は、隣組長を代わりに引つ張るとのおどしもありましたの

で、一応様子を見かたがた、集合場所の女子師道大学に出掛けて行きました。そこにはたくさんの人が呼ばれていて、日本人軍医とロシア人将校の立会いで、身体検査らしいことしているのが窓から見えていました。

私も心配で気がかりでしたので、主人と共に出掛け、中の様子を塀の外から見ていましたが、夕方になり雪が降り出したので、私は主人を塀の内側の集団の中に残したまま、家に帰って待つことにいたしました。現場の様子は、ほとんどの受検者が正面玄関から入って裏に抜けて集合している模様で、玄関から入って玄関に戻ってくるのは全員が身体障害者の方や、一見すぐ病気とわかる人たちでありました。

主人はあと五人目というところまで進んでいましたが、雪が激しくなったので、途中で打ち切りになったと言って、夕方になって帰って来ました。

朝になって、受検を済ませた人たちのその後がどうなったかを確かめるために、主人は恐る恐る現場を見に行きましたところ、昨夜のうちに全員が南嶺に移動させられたとのことで、塀の外側には家族らしき人た

ちが心配気に突っ立っていました。馬渡さんとも話して、二人とも馬鹿らしいから行くのはやめることにしました。しかし、二人とも現場での下調べで住所名前をとられているので、これをどう取り消してもらおうかが大問題になりました。

馬渡さんは屋根裏、主人は床下に抜け穴を作り、ソ連兵の声を聞いたらずぐに床下にもぐる準備をしました。私は娘の幸枝を背負い、臨月近い長男洋をおなかに抱えて、ペトロフ中佐に面接して主人は、結核だから名簿から取り除くように頼みに司令部に二日間通い、女性の兵隊が取次いでくれて目的を達しました。いつまた順番が回ってくるかもしれないので、病床も準備しておきました。男性は外出する場合は、どこでソ連兵に捕らえられるかわからないので、子供をねんねこで背負い、使役を逃れるようにしております。女性は丸坊主になって男に見せかけ、ソ連兵の乱暴から逃れました。

昭和二十年は辛うじて越冬し、二十一年になり、二月ごろになるとソ連兵が少なくなり、その代わりに中

共軍が東北民主連軍と称してだんだん多くなり、新京に進駐していた国府軍との間の内戦が始まりました。運が悪く、慈光路農寿ビルの我が家は五階建ての二階にあつたため、三階以上国府軍に接収され、このビルを中心にして八路と国府両軍の激しい戦闘が始まり、窓は銃弾が飛び込んでくるので、畳を立てかけて防ぎました。

主人は三階の国府軍から飯を炊いて持つてくるように言われたが、弾丸が飛びかっっており、危険なので、玄関ドアのフシ穴から外の戦争の様子をのぞいてみて、家の中に入ろうと後ろを振り返って何秒もたないうちに、大音響をたててビル全体が揺れ動きました。家の中には電気が消えて天井の壁が落下し、主人が数秒前までのぞいていた玄関の厚い材木で補強した扉は、真ん中からヘシ折れていました。後退が数秒でも遅れていたら、主人は顔を割られていたことと思います。八路軍の迫撃砲がビルの二階部分に命中して、一間四方の大きな穴を開けたのです。このとき、国府軍は負けて、ビルは八路軍に占領されました。主人はこの

とき九死に一生を得たと私は思いました。ビルを占領した若い八路軍の兵隊たちはキビキビした好青年たちで、借り物はきちっと返してくれました。

昭和二十年十一月二十九日早朝、長男洋はソ連軍の戒厳令下中、慈光路農寿ビル二階の家で生まれました。その日主人は、畑を越えた道向こうの産婆さんの家まで命懸けではって行き、産婆さんを連れてまたはって帰ってきてくれましたので、無事子供を産むことができました。オンドルを作つてあつたので、外はマイナス三〇度の厳冬でも暖かい産湯をつかうことができました。

昭和二十一年七月、内戦がやんだすき間を利用して、日本人の引揚げが始まりました。リュックサックも手縫いで大小二つ作り、沖繩には様子が分かるまで帰れないので、一応は福島の親戚を頼つていく予定でオーバーも準備、二人分の子供のおむつで持ち物はいっぱいになりました。写真類は持つなどの注意がありましたが、その時はその時として、すべて持てるだけ持ちました。花井の家族と私たちは地区が違うと、

一日違いの出発になりました。

出発は南新京駅からで、無蓋貨車の隅には便所用として大きなドラム缶が置かれました。その晩奉天に着き、鉄西の工場の跡らしいれんが造りの建物に入り、ゴザを敷いて休むことになりました。一週間ここで過ごし、また出発しましたが、汽車は止まっては進みを繰り返して錦州の収容所で二週間ぐらい過ごし、いよいよコロ島に向かいました。

引揚船は改装航空母艦で「熊野丸」という三千六百人乗りの、割に大きな船でありました。船は大海原を汽笛をならして大陸を離れました。八年間の満州生活でしたが、結婚もし、子供二人を連れて無事船に乗ることができ、これまでのいろいろの思い出をかみしめながら、寂しさと安心のいりまじった思いで、海を見おりました。

佐世保には着きましたものの、船中でコレラが発生したとのことで、上陸が何回も延びて結局七月末、新京を出発、十月一日に佐世保上陸という六十日かけての引揚げとなり、もう少しで娘を船中で栄養失調にし

てしまふところでした。

佐世保収容所では奇遇にも疎開先から沖繩に引き揚げる主人の従兄に当たる安元さんご家族と、お会いできました。

私たち家族は昭和二十三年三月まで、福島県いわき市の母の実家、前田力さん方で御厄介になり、最後の引揚船で佐世保経由、今度は主人の郷里沖繩に引き揚げました。沖繩中部の久場先収容所で、沖繩戦をくぐり抜けて生き残った主人の両親、弟妹と初対面のあいさつをいたしました。

しばらく南部玉城村で両親の家にお世話になり、那覇市に移転しました。私と主人が結婚してから五十二年、敗戦から五十年、沖繩に引き揚げて私が沖繩の人になってから四十七年になりました。主人はその間、新聞の販売業やたばこ製造業などの仕事を経て、ただいまは印刷業を経営しております。

昨年は中国大連市に印刷の合弁会社を設立し、平成七年から操業を始めました。私の主人の姓名は池宮城幸興で七十七歳であります。一病息災で現役を務め

ております。

私は生まれ故郷の福島よりも、満州時代よりも長い年月、第二の故郷沖繩に住んでおります。

主人と私は共白髪となり、満州生まれの娘は五十一歳、長男洋は五十歳となりました。沖繩に引き揚げてすぐの昭和二十四年生まれの子男晃も既に四十六歳になりました。晃は写真が専門で毎日新聞社の報道部にもおりましたが、彼の写真集「旧満州」が取り持つ縁で、当時台湾在住の張学良先生に知己を得て、七年の春、ハワイで先生のお直筆で「大連池宮印刷公司」の看板を書いていただき、工場ビルの壁面に掲げました。晃はこの会社の総務経理に就任いたしました。

私たちは五十年前の新京引揚げのときには、二度と訪ねて行くことはあるまい、とあきらめていました。新京（現長春）訪問も、十年前、五年前、平成七年と三回にもなりますが、年ごとに近代都市に変わりつつあって、昔の面影は徐々に薄れていきつつあります。やがては私たちの心の中の思い出として残るだけになることでしょう。

【執筆者の横顔】

澄子さんは、大正十三年一月十三日に福島県二本松で生まれました。

父、花井弘氏が税務署勤務で転々と二年・三年ごとに税務署を転勤していたので、澄子さんは青森県の野辺地で小学校に入学し、二年生のときは山形県の米沢に、四年のときは山形に転校した。

昭和十二年、澄子さんが高等科二年のときに、父は単身満州国に渡り、満州拓殖公社勤務となって赴任、翌十三年三月十五日、家族召致となって、母子七人を迎えに来て家族あげて渡満した。父が準備していた新京の永昌路の住宅に落ち着き、姉は会社に勤め、澄子さんは新京の弥生高等女学校に入学し、楽しい学生生活を送ることができて卒業と同時に、興農合作社中央会に入社した。

昭和十八年三月、同じ職場の興農合作社職員である沖繩県出身の池宮城氏と縁あって職場結婚となった。

御主人は勤めながら、昭和十六年四月から新京の法政大学で勉学し、同十八年繰上げ卒業し、満州中央銀

行と興農合作社の双方で設立した興農金庫本店勤務となった人だった。

二十年七月ごろ、全満州の世相が緊迫した情勢で日本人の男性は老若を問わず召集され、御主人にも召集令状がきた。満一歳になった子供（幸枝さん）の写真をポケットに入れて出発した。

澄子さんは隣組長の命令で疎開のため新京郊外の農事訓練所に行ったり、また新京の自宅に戻ったりしていた。

九月中旬に御主人が召集解除となって新京の自宅に帰ってきた。御主人はもはや、疎開して家族はいないと思いつながら帰ってきたので、家族に会えて驚き、安心して喜びあった。

新京のソ連駐屯地司令官ペトロフ中佐の名で隣組長を通し、女子師道大学校庭に集合せよとの命を受けた。澄子さんは妙案として、ソ連司令官に対し、「主人は結核だから、池宮城の氏名を名簿から取り除くよう」二回も願いに通い、女性の兵隊が取り次いでくれて目的を達した。

戦後五十年を澄子さんは振り返って感無量。

澄子さんのお陰で御主人はシベリア行きはならずに済んだのである。

満州生まれの長女は五十一歳、長男は五十歳、沖縄に引き揚げて昭和二十四年生まれの次男は四十六歳、それぞれ社会人として活躍をしている。

新京を訪問すること三回に及び日中友好事業に大きく貢献している澄子さんである。

（社）引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助